

エスポワール 希望 L'ESPOIR

復刻版概要

- 巻数 全3巻・別巻1
- 体裁 A5判・上製・総約1,780頁
- 解説 高良留美子(詩人・評論家・作家)
- 価格 本体96,000円+税
- ISBN978-4-906943-04-3
- 発行 2012年11月
- 推薦 岩橋邦枝(作家)
- 刊行 鳥羽耕史(早稲田大学文学部教授)
- 原典提供 成田龍一(日本女子大学人間社会学部教授)
- 高良留美子他 渡邊澄子(大東文化大学名誉教授)

復刻版巻数	収録原本(号数は通号で表示しています)
第1巻	1号(1952年1月)〜4号(1952年11月)
第2巻	5号(1953年8月)〜7号(1953年11月)
第3巻	8号(1954年1月)〜11号(1955年7月)
別巻	広島版1号(1948年11月)〜4号(1951年6月)

文化と平和を愛し 明日への希望を創り 行く文化総合誌

増部増頁断行

ESPOIR

原爆を意識的契機として広島で生まれた本誌は、
 真実を語り、表現し、人間の苦悩を訴える「共通の広場」を求め、
 若い世代が提携を模索した、文化総合雑誌である。
 前衛芸術への接近、保守勢力への抵抗、戦後フェミニズムの萌芽……
 戦後思想史・サークル運動史を解明する資料として復刻!

新らしい文学・芸術・社会・生活

希望

復刻版

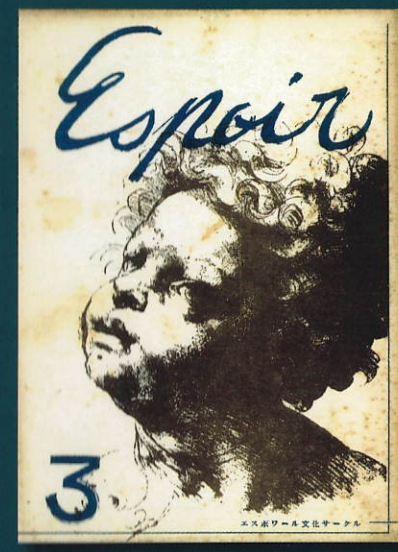
1948⇒1955

- 解説 高良留美子
- 巻数 全3巻・別巻1
- 価格 本体96,000円+税
- 刊行 2012年11月
- 発行部数 限定70セット

L'ESPOIR

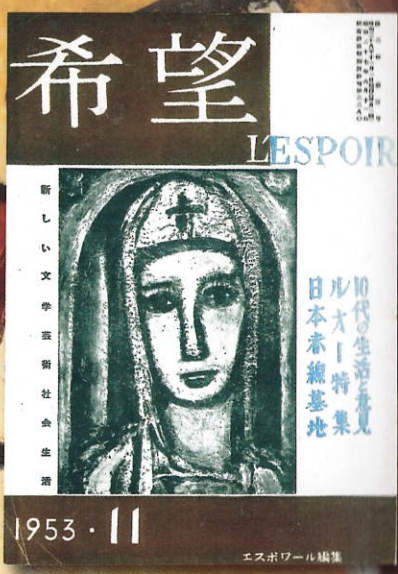
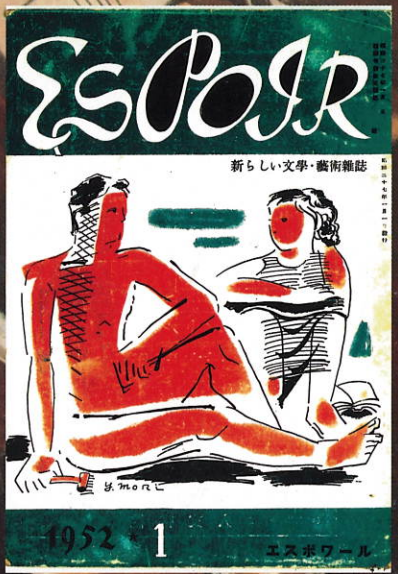
主要執筆者一覧

芥川比呂志	栗原 貞子	中田 耕治
安部 公房	黒羽 英二	中村真一郎
阿部 知二	桑原 武夫	中山 茂
安部 真知	高良 とみ	難波田龍起
荒 正人	高良真木子	西野 壽二
石母田 正	高良留美子	野間 宏
井上長三郎	小海 永二	花田 清輝
大島 辰雄	小林 謙一	原 誠
荻 昌弘	小松 清	日野 啓三
尾崎 正治	佐々木基一	広津 和郎
小田島雄志	椎名 麟三	堀田 善衛
梶山 季之	白井健三郎	丸山 真男
桂川 寛	園部 三郎	三島由紀夫
加藤 周一	竹内 康宏	宮城 音弥
金井 利博	竹内 好	村上 光彦
河本 英三	武田 泰淳	森 芳雄
木島 始	武谷 三男	矢内原伊作
木下 順二	鶴岡 政男	矢内原忠雄
串田 孫一	十返千鶴子	吉井 忠
窪田 啓作	中蘭 英助	



三人社
 〒606-8316
 京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
 電話 075-762-0368
 FAX 075-762-0369
 振替 00960-1-282564

※図書館様・書店様へ
 小社は少数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。



三人社

『希望』の復刻を喜ぶ

岩橋邦枝（作家）

あの時代の熱気が甦る。

『希望』という雑誌を私が初めて知ったのは、一九五三年（昭和二八年）春にお茶の水女子大学に進学して寮生活をはじめた年だ。冬休みに帰省する前だった。読書好きで話の合う寮の同年生の友人に、『希望』に新年から参加しようと言われた。彼女の説明を聞き雑誌の目次を見て、私はすぐさま誘いに応じた。学内の文学サークルは樋口一葉や鷗外がテキストで、新風を期待して入った私にはつまらなかった。

『希望』の会合に初めて出席した日、学生を中心にした人たちの論じあう内容が私にはむづかしくて、ついていけなかった。みそつかず、という意識がその後も抜けなかったが、熱っぽい会合の論議や、気鋭の戦後作家を囲む座談会を隔つこの席で貪るように聴き、雑誌『希望』を熟読した。野間宏、安部公房、木下順二……みんな三十代の若さだった。私は、知的好奇心が活発で、吸収力が漲っていた年頃だ。『希望』の文学・芸術運動は、私に新しい目ざめを促し文学的感受性を育ててくれた。一緒に参加した友人川口澄子は、半年後と翌年の終刊号の『希望』に詩を発表し、同時期に私の初めて書いた小説が文芸誌に掲載された。野間宏氏が読んで激励してくださった。

雑誌『希望』は、戦後の昭和二十年代の、若い世代の知性と熱情が誌面にみちている。貴重な、生きていく記録だ。あの時代の、未来への希望をかけた文化運動に具体的に立ち会い、生き生きとしたエネルギーを実感できる。

一九五〇年代の奥行きを示す

成田龍一（日本女子大学人間社会学部教授）

「戦後」の再検証が、さまざまな次元でなされている。焦点のひとつは、いうまでもなく一九五〇年代であり、サークル運動である。一九四五年を規準とする戦後史像を相対化する視点をここに定めるのだが、中央／地域、論壇／運動、プロの作家／アマチュアの書き手などの対比が念頭に置かれてもいた。しかし、ここに復刻される『希望』は、いっけん対立的な双方の要素をあわせもち、重要な位置を占める。

『希望』の発刊は、広島高校など、学生たちの「ESP文化サークル総合誌」であり、一九四八年一月に創刊された。群馬、札幌、岡山などに支部（支局）を有したが、一九五二年一月に東京に本拠を移し、東京大学を中心としつつ、他の大学および支部と連携をとる体制となる。あわせて、「スタッフ・ライター」として、加藤周一、安部公房、野間宏、木下順二、花田清輝といった作家・評論家が顔を並べており、さまざまな対立する境界をまたぎ越していくのである。

主張内容も、同様である。東京版の第二号（一九五二年六月）に掲げられた「希望提唱」は、「現実がわれわれをさいなんでいる」と書き始められ、「共通の広場」を求め、文学・芸術による「表現」を「抑圧され虐待された自己の現実」の宣言であり、抵抗である」とし、「世代を越えた良心」を求め、「階級と立場を越えた良心の扉」を開くとする。女性の観点をはつきりと打ち出している。

一九五〇年代サークル運動の奥行きが、『希望』によりうかがうことができる。一九四五年を画期とする思考との重なりをあわせて読み取ることができる。得難い雑誌の復刻を喜ぶたい。



三つの運動のミッシングリンク

鳥羽耕史（早稲田大学文学部教授）

一九四八年一月に創刊された『ESPORIR』広島版は、「広高、文理大、女専」などの若いメンバーで構成されたエスポワール文化サークルの雑誌であり、戦後サークル運動の勢いを伝える。一九五二年一月、占領末期の『希望』東京版創刊号の目次や、巻末に掲げられたスタッフ・ライターは、ほとんど（夜の会）や（総合文化協会）など、花田清輝と岡本太郎が戦後にはじめた芸術運動の人脈から構成されているように見える。それが独立後の六月に刊行された二号で学生の座談会を掲載したところから早くも変化をはじめ、翌年八月の五号で「国民文学論の総決算」を特集する頃には、すっかりサークルの雑誌の様相を呈している。

戦後サークル運動に端を発し、戦後芸術運動から一九五〇年代サークル運動への転換を鮮やかに示すこの雑誌は、しかしこれまでほとんど幻の存在だった。東京版すらごく限られた機関にしか所蔵されず、まして広島版はほとんど通覧不可能だった。今回の復刻で初めて明かされる全貌は、単に一つの雑誌の流れを示すのみならず、これまで別々に捉えられてきた三つの運動をつなぐミッシングリンクを提示するものとなるだろう。最後の編集代表人として、『トップ屋』以前、『広島文学』を離れたばかりの梶山季之が関係しているのも面白い。全集未収録の三島由紀夫や安部公房へのインタビューを含む「作家との対話」シリーズや、「近代の超克」を思わせる「共同研究座談会」「世代を結ぶ知的協力会議」など意欲的な編集の成果は、六〇年を経た現代に多くの発見をもたらすはずだ。

混沌たる現代の指標に

渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

一九四八年、原爆で廃墟とされまだ復興が軌道に乗っていないかった広島で、私たちの先輩に当たる学生たちが中心となって『ESPORIR』が創刊されていたとは！その事実を少しも知らずに、東大正門から少し行ったところにあった喫茶店「南米」(?)で開かれていたエスポワールの会に学生だった私はよく出かけていた。小海永二さんがいつもいた。ときどきお近くにお住まいの木下順二さんが見えた。滅多にお顔をみせることはなかったが、山本安英さんがひよっこお見えになることがあり、あつ、「夕鶴」の「つう」と興奮したことを思い出す。

熱い政治の季節だった。「新聞部」に所属し、編集長に推された私だったが、その論旨に感動してある文章を掲載したところ、その書き手が共産党員だったらしく学長の忌諱に触れ、これが原因となって、大学創立以来といわれる学生運動に発展した頃だった。エスポワールの会に通ったのは「何でも知りたい」「広く生きたい」意欲が旺盛だったからだ。この雑誌には、その後の一時期交流を持ち、あるいは教示を得た方々、例えば安部公房、佐々木基一、中村真一郎、野間宏、山下肇、佐藤春夫、窪川鶴次郎、壺井繁治、藤島宇内その他、懐かしい顔が並んでいる。皆さん、時代にコミットし、人生に相渉った方々の声の聞ける機を得た事の意味は極めて大きい。広島版は是非読みたい。

エスポワール！ここから立ちのぼる先人の賢言を噛みしめ、指標とすることで、希望の持てる社会再生に漕ぎだしたい。漕ぎ出さねばならぬ。

